

国立文化財機構文化財防災ネットワーク推進事業による川崎市市民ミュージアムレスキュー支援

奈良文化財研究所が所属する国立文化財機構では東日本大震災における文化財レスキュー事業を基盤として、今後発生が予想される大規模災害に備え、全国的なネットワークの構築を目的に「文化財防災ネットワーク推進事業」を展開しております。

昨年10月、日本列島に大きな爪痕を残した台風19号では各地で大きな被害が発生し、特に大規模河川の流域では各所で氾濫が多発しました。その中で神奈川県川崎市では市民ミュージアムの地下収蔵庫が水没し、収蔵されていた多数の文化財が被害を受ける事態が発生してしまいました。

この水没文化財を救出し、応急処置を実施するために川崎市より依頼を受けた防災ネットワークが機構内各施設(国立博物館・文化財研究所)に呼びかけ、本年1月から3月にかけてレスキュー作業に従事しました。奈文研からも延べ13名の職員が川崎入りし、様々な文化財の救出・応急処置に参加してまいりました。

川崎市市民ミュージアムは近代美術品からマンガ・映画・写真や民俗資料、考古資料など、扱う文化財が非常に多岐にわたり、被災した文化財もそれぞれについて救出方法や応急処置の手順に異なったノウハウが必要となります。参加した研究員や職員は、それぞれの専門分野とは全く異なる分野の文化財のレスキュー作業をおこないました。とまどいはあったものの、幅広い文化財のレスキュー作業に従事できたことの意味は大変大きく、今後発生が予想される災害に備える意味においても貴重な経験となりました。

(企画調整部 中村 一郎)



救出・消毒した美術作品の仮保管作業

『奈文研論叢』の創刊

奈文研では、さる2020年3月19日に、新たな論文集『奈文研論叢』の第1号を刊行しました。

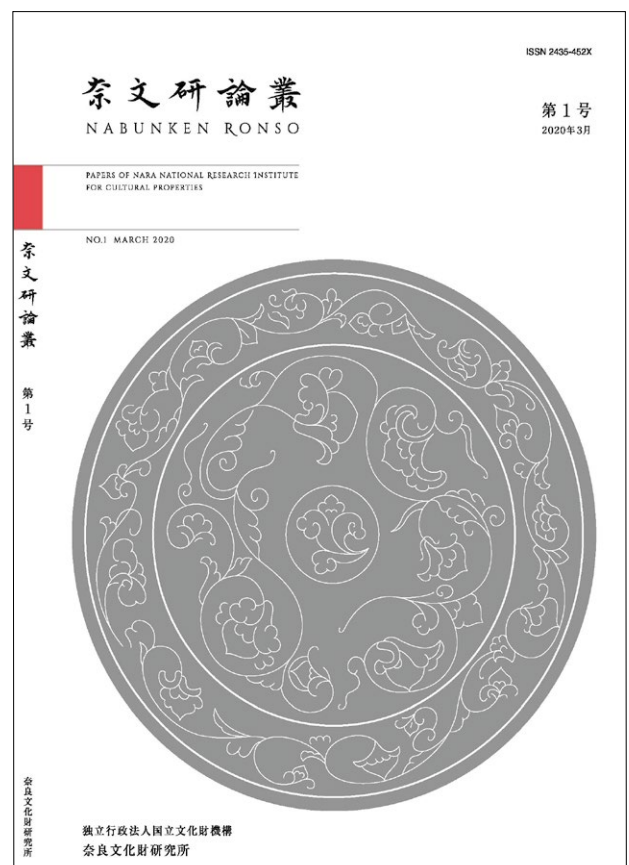
奈文研における研究論文の発表の場には、『奈良文化財研究所紀要』、『研究論集』、『文化財論叢』がありましたが、いずれも様々な制約をもっていました。このため、多くの所員から、テーマや分量にとらわれず、個人研究の成果を自由に発表できる場を求める声が寄せられていました。その声に応え、『奈文研論叢』は創刊されました。

学術的な水準を保つために査読制をとり、海外への情報発信の一助として英文要旨を付しました。

木簡から採った字と東院地区出土の唐草文須恵器杯蓋をデザインした字体・図案を用いた表紙は、新しい論文集にふさわしいものになりました。

現在、第2号について今年度内に刊行をすべく、準備に入りました。『奈文研論叢』を末永くよろしくお願い申し上げます。(企画調整部 加藤 真二)

※『奈文研論叢』は、平城宮跡資料館、飛鳥資料館、いざない館、六一書房にて販売いたしております。(定価 税込¥1,100)



『奈文研論叢』第1号表紙